

# 先秦時代と秦漢時代の杭州

陳 橋 駅

浙江大学

## I 禹の伝説から杭州が歴史時代に入るまで

明朝の田汝成は「杭州の名、相伝うに神禹 洪水を治め、諸侯と会稽に会い、此に至りて杭（「航」の字と通用され、船旅の意）を捨てて陸に昇り、因りて禹杭と名づく。少康に至り、庶子の无余を越に封じ、以て祭祀を主らしむ、又余杭と名づく」と言った。田汝成が考えた禹の旅の経路は、実は彼が所在の明朝時代の水路であると考えられる。禹は船に乗って蘇州から拱宸橋或は大関に至って船着場へ上がり、また、船で南星橋より錢塘江を渡り、最後は紹興に至った。会稽に万国諸侯大会を参加する諸侯らも、恐らくこの経路を辿ったであろう。だから杭州は禹の伝説に既に登場したと言える。

「禹治水」の物語はあくまでも神話であるが、この神話と杭州との関わりが前述した「杭を捨てて陸に昇る」のみならず、史学権威の顧頡剛も1920年代に「禹は南方神話に登場した人物であり、この神話の舞台は越（会稽）にある」と指摘した<sup>1</sup>。それに関連して、冀朝鼎は「長江流域の特殊な地理的条件によって、森林、野獣、湖沼、洪水、特に錢塘江（当時は長江の支流）の洪水被害が酷かったため、治水に対する熱き願望の中から禹と治水の伝説が現れた。」と指摘した。尚、顧頡剛は『詩』商頌の長發の「洪水茫茫たり、禹 下土方を敷く」に記された洪水は錢塘江のものだと考えた。それに従えば、禹に関する神話は、杭州に近隣する錢塘江と関連があると言えよう。

顧頡剛の禹の伝説に関する論著について、冀朝鼎は以下のような意見を述べた。

「将来新しい証拠が提示されれば、顧頡剛の結論を証明するか、或いは否定する可能性もある。いずれにせよ、顧氏はこの伝説に対する有力な批判は、中国の水利事業の発端はある英雄神明の仁愛と自己を犠牲にする行動に功を帰すべきという神秘的な理論を打ち破った。宗教直系学者らが何世紀にわたって繰り返して断言してきたことによって、この神秘的な理論は既に宗教的な神秘性を持ち、この問題におけるあらゆる科学的な研究の巨大な妨げになった。治水活動の起源について客観的な研究を行うために、この伝統的な理論を打ち破らなければいけない。」<sup>2</sup>

顧氏の文章は1920年代に公表され、また、冀氏の文章は1930年代に公表された。彼らが「禹治水」の伝説を議論してから半世紀以来、第四紀学、考古学、古地理学、歴史地理学などの進展、及び年代測定技術の進展により、この伝説に登場した洪水は、錢塘江と黄河の洪水ではなく、第四紀温暖期の海面上昇により発生した洪水であることが明らかになった。禹の治水

1 『古史辨』、北京朴社、民国十五年（1926）出版。

2 『中国歴史上的基本經濟与水利事業的發展』、朱詩鰲訳、中国社会科学出版社、1981年。

事業の伝説は、ノアの洪水の伝説と同じように、当時、世界各地での民衆が同じ遭遇から伝えてきた物語ではないかと思われる。まさに私が『越族的発展与流散』という文章に述べたように、「越族の故郷は洪水に呑み込まれた。人々は、偉大な神明が現れ、洪水を治めることを望んでいた」。会稽山と四明山の越族原住民の地域で広まった伝説は、顧氏が指摘したように、「この神話（伝説）の舞台は越（会稽）にある」のである。先史時代の越人は浚渫の治水方法で寧紹平原と杭嘉湖平原の洪水を治め、ようやく現在の杭州を含む越地域の歴史時代を迎えた。

さて、現存する文献において、越地域、或いは于越地域に関する最初の記載は、今本『竹書紀年』周成王二十四年の条に「于越 来賓す。」とあるのである。ここに説明すべきなのは、この記載の出典である今本『竹書紀年』は南宋に成立した書である。王国維は今本『竹書紀年』がその信憑性には欠けるところがあると指摘した。確かに今本『竹書紀年』は宋代の人によって多少添削されたが、その記載を決して一概に否定してはいけない。そこで、「于越 来賓す。」の記載について、その信憑性をもう少し検討しておこう。

まず、外族「来賓す」のような記載が『竹書紀年』に常に見え、例えば、古本『竹書紀年』の相七年の条に、「于夷 来賓す。」と記されており、少康二年の条にも「方夷 来賓す。」と記されている。このような記載はテキストとして信憑性があると言えよう。また、今本『竹書紀年』の于越に関する記載はその史実が既に確認された。即ち、周元王四年の「于越 呉を滅ぶ」の史実は『史記』六国年表によって確認でき、また、周貞定王元年の「于越、都を琅邪に徙す」の史実は『越絶書』のほぼ同じ記載によって確認できた<sup>3</sup>。

ところで、今本『竹書紀年』の「于越 来賓す。」という記載が、後漢時代の越地の伝説と同じで、互いに引証できる。即ち、『論衡』超奇篇には、「白雉、于越より貢ぐ。」と記されており、『論衡』异虚篇にも「周の時、天下泰平たり、越嘗て雉を周公に献ず。」と記されている。ここに注目すべき点は、「越嘗て雉を周公に献ず。」という伝説は、その時代がまさに「于越 来賓す。」と同じく周成王の時代であることである。

以上の分析によれば、遅くとも紀元前11世紀の末から、杭州を含む于越地域は既に歴史時代を迎えたと言える。

## II 呉越争覇から秦の統一まで — 钱塘江の渡し場

第四紀の海面上昇のため、主に寧紹平原に住んでいた越族がほかの地域へ移出した。その一部部分、即ち、後に「句呉」と称される越族が、現在の江蘇省南部、浙江省西部の山間部に移住したと考えられる。その後、海面が低下し始めた。彼らは山間部を出て、浚渫の方法を用い湖沼や湿原を整備し、農業生産を行った。その結果、現在の紹興を中心とした「于越」と現在の蘇州を中心とした「句呉」という2つの異なる越族の国が形成してきた。この2つの異なる越族の国に関しては、『越絶書』に「隣と為り、同族なり」<sup>4</sup>「気と同じくして、俗を共にす」<sup>5</sup>と言及した。また、『呉越春秋』巻三に「呉は越と音を同じくして、律を共にし、上は星宿に

3 『越絶書』巻一「越伐強呉、尊事周室、行霸琅邪。」又、巻二「句踐徙琅邪、到建武二十八年、凡五百六十七年。」

4 『越絶書』巻六。

5 『越絶書』巻七。

合し、下は一理を共にす。」と記されており、『呂氏春秋』知化篇には、「呉は越と、土を接して境壤を隣り、交通属し、習俗同じく、語言通ず。」というふうにはっきりと記されている。これらの記述によれば、呉と越は同じ言語を使う一族の両国であることがわかる<sup>6</sup>。『国語』越語によると、春秋時代初頭の両国の国境は、「後（語）儿」、即ち、現在桐郷市南部の崇福鎮の当りである。同一の部族であるが、春秋時代後半に入ると、呉と越の間戦争がしばしば興り、小規模の紛争から全国を挙げた大規模の戦争にまで激しくなってきた。結果としては、呉王夫差が北上し中原制覇を果たした直後、越王句踐が機に乗じて、呉を滅ぼした<sup>7</sup>。このような両国の戦争に関しては、『春秋』には、以下の記載が見える。

『春秋』昭公五年（前537）「冬、蘇子・葵侯……徐人・越人 呉を伐つ。」

『春秋』昭公三十二年（前510）「夏、呉 越を伐つ。」

『春秋』定公五年（前505）「于越 呉に入る。」

『公羊』定公十四年（前496）「五月、于越 呉を樵李に破る。」

『春秋』哀公元年（前494）「呉王夫差 越を夫椒に破る。樵李を報いるなり。遂に越に入り、越子は甲楯五千をもって会稽を保つ。」

『左伝』哀公二十二年（前473）「冬十一月、丁卯、越 呉を滅ぶ。」

このような呉と越の間の戦争は、地理的には常に銭塘江と密接な関係があると考えられる。例えば、魯哀公元年に興った呉越戦争は、呉軍が越を討伐する際、銭塘江を渡らないと越に入れないと思われる。故に、越国が銭塘江の水辺に防備を配置した。

『越絶書』には、「石塘」、「防塢」、「杭塢」のほか、また、「固陵」という重要な防御点についての記録が見える。即ち、『越絶書』巻八には、「浙江南路の西域は、藩蠡 兵を敦（「屯」の字と通用される）する城なり。其の陵、固く守るべく、故に之を固陵と謂う。しかる所以は、其は大船軍の置く所を以てするなり。」と記されている。

この銭塘江南岸に位置する「固陵」は、地方志にはみな六朝の「西陵」（呉越国時代に「西興」と改めた）と認められているが、近年、現在の蕭山の城山と考えている学者もいる。もちろん、先秦時代には、渡し場とした「固陵」の対岸、即ち、現在杭州の江干の当りには渡し場も存在すると思われる。しかし、現存する文献を探せば、六朝時代に江干の当りに「柳浦」という渡し場が出てくるが、その以前の記載が残っていない。ところが、『呉越春秋』巻六には、「今、夫差の水犀の甲を衣る者は十有三万人」、越王句踐が、「乃ち習流二千人、俊士四万、君子六千、諸御千人を発す。」と記されている。このような大規模の戦争は、銭塘江兩岸の複数の渡し場を利用しなければならないと考えられる。

ところで、『南史』顧憲之伝には、齊の永明六年（488）に「西陵の戌主杜元懿 呉興歳俛たり、会稽年登り、商旅の往来は歳に倍するを以て、西陵の牛犂の税、官格は日ごとに三千五百、加えて一倍に至るを求め、計りて年ごとに長ずること百万。浦陽の南北津及び柳浦の四埭、乞うらくは官を為して領摂せんことを、年ごとに格外に長ずること四百許万。」と記されてい

6 鄒逸麟「譚其驥論地名学」、『地名知識』1982年第2期所収。

7 陳橋駅「論句踐与夫差」、『浙江学刊』1987年第4期所収。

る。この記載からみると、遅くとも南北朝の時代には「西陵」と「柳浦」は錢塘江の重要な渡し場となっていたことがわかる。また、錢塘江の支流である浦陽江の「南北津」（という2つの渡し場）は、私見によれば、「浦陽南津が浦陽江口の漁浦に位置し、浦陽北津が漁浦対岸の定山に位置する」<sup>8</sup>。ところで、ここに示した「定山」という渡し場が、現在の杭州伝塘の西に位置しており、一部の学者は秦代の錢唐県治がこの当りに立地すると主張した。

以上、六朝時代の「柳浦」と「定山」という2つの渡し場は、春秋戦国時代の錢塘江の渡し場や後世の錢塘県と深く関係すると想定される。

尚、前述した錢塘江兩岸の「固陵」、「柳浦」、「漁浦」、「定山」の4つの渡し場、「固陵」以外の3つはそれらの名が現存する文献に見えない。それらの具体的な地名や位置関係については、あくまでも推論だが、春秋戦国時代以後の秦代に入ると、錢塘江北岸の渡し場に関する記載が『史記・秦始皇本紀』に見える。これは、秦始皇三十七年（前210）に「（始皇帝）錢唐に至り、浙江に臨み、水波悪し、乃ち西すること百二十里、狭中より渡る。」これは、杭州地域の渡し場に関する最初の記載である。この記載から、当時、錢塘江北岸には渡し場が存在することが確認できる。胡三省は、「所謂水波悪き処、則ち今の錢塘より西陵に渡る者は是れなり。西すること狭中より渡らば、則ち今の富陽、分水の間なり。」<sup>9</sup>と考えている。胡三省の言った「錢唐」は秦代に置いた錢唐県を指す。

後に述べるように、錢唐県治の位置がまだ明らかになっていないが、現在の江干より定山までの地域に当ることはほとんど疑問がない。

### III 秦代の錢唐県及びその県址

上述のように、現在の杭州地域が文献に始めに見えたのは『史記・秦始皇本紀』の「錢唐に至り、浙江に臨む。」であるが、先秦文献の『越絶書』<sup>10</sup>にも錢唐の名が見える。ところが、現在の『越絶書』は後漢初頭の袁康、吳平によって添削・改竄されたものであり、資料批判を加えると、『越絶書』に見える錢唐に関する記載には明かに誤りがある。この記載は、後漢時代初頭の人に書き込まれた秦代以降のものであり、頼りにならないと判明した。

秦代には全国統一の過程で郡県制度が施された。当時、全国を三十六郡に分けること、また、会稽郡の郡治を呉（現在の蘇州）に置き、下に二十六の県を置くことについては、学者らがそれぞれ見解を持っているが、錢唐県の存在については疑問がない。

ところが、秦代の錢唐県の具体的な位置は今の段階でまだ確証されていない。

現存する『山海経』や『禹貢』や『春秋』の経伝など中国最初の文献を調べると、この地域において、確かにいろいろな地名が出てくる。例えば、『山海経』には「浙江」が見え、また、『春秋』の経伝には浙江以北の地名である橋李、陘、御儿なども見える。しかしながら、このような地名は錢唐県位置の比定する研究には、有力な根拠にならない。

8 陳橋駅「論歴史時期浦陽江下游的河道変遷」、『歴史地理』創刊号所収、上海人民出版社、1981年

9 『資治通鑑』卷七秦記二「乃西百二十里、从狭中渡」、胡注。

10 『越絶書』は先秦文献であることについて、私が点校本『越絶書』（上海古籍出版社、1985年）の序に既に考証を加えた。

文献を調べる限り、歴史上、秦代の錢唐県旧跡を目撃した唯一の人物は劉宋時代に、当時錢唐県令の劉道真だろう。劉道真の『錢唐記』には、「昔、(錢唐)の県境 江流に逼り近づき、県 靈隱山の下に在り、今に至りて基址猶お存す。」と記されている<sup>11</sup>。この記載から、紀元前3世紀末に建てられた県治の建築遺跡が4世紀初頭にまだ残ることがわかる。残念ながら、『錢唐記』という地方志は、僅かな一部が後世の人に引用され、その大部分が亡佚した。清代初頭の毛奇齡から現代の学者まで、主にこの記載、もしくは『水経注』漸江水柱に記されている「浙江は又東に靈隱山を逕ぎる。……山の下に錢唐の故県が有る。」などの記載から、秦代の錢唐県県址の地理的存在について、考証を加え、いろいろ議論されてきた。

毛奇齡が、秦代の錢唐県県址の立地条件に関して、まず以下の疑問点をあげた。「夫れ一の県治を作り、も亦必ず千百の廬旅周くその中に居く有り、云う所の千室の邑の如し。況や既に之に城を成せば、即ち凡そ内は府軍、外は沟隄郭郭なり、山溪は弄の如く、臚布し難きを恐れ、然るに且つ一の都尉を設けて其の中に屯守せしめ、自から大方域を以て郡国に四通すべき者に絶た非ざれば、駐足する所無し、而るに靈隱寺の前の方丈の地能く之を容ると謂わんや？」

ところが、毛氏の見解には少なくとも2箇所の誤りがある。まず、靈隱寺近くの山を「靈隱山」と誤解した。「靈隱山」との言い方は、六朝の人が使い始め、『漢書・地理志』に載っている「武林山」の言い方と同じく、現在の西湖を囲む山々、いわゆる「西湖群山」の意味に近い<sup>12</sup>。次に、毛奇齡が見た「府軍」、「千百廬旅」などのような清代前半の繁昌時期の城郭を、秦代に郡県制度が実施された初期の城郭と誤解した。ところで、清の時代と言っても、例えば、广东省恩平県のような小さな城郭も存在する。清代初期の恩平城は、周りが六百四十歩、門が四つ、その西と北の門が石や草に塞がれ、県庁の瓦屋三間及び文廟の二箇所を除けば、全城がみな草葺の建物である<sup>13</sup>。秦代の見城が、特に鎮まった間もない「南蛮馱舌」のところに立地する見城は、必ず城郭があるとは限られないと思われる。

毛奇齡以後、倪璠が『神州古史考』<sup>14</sup>には、文献記載に基づき、始めて秦代の錢唐県の位置比定を行った上で、秦の県治が徐、范(梵)両村周辺に立地していた結論を出した。この結論は、伝統文献の考証によって、秦代の錢唐県に関する研究では、最も高いレベルに達したものであると思われる。

最近の二、三十年以来、秦代の錢唐県に関する研究が再び盛んに行われるようになった。そこで、近年、この課題に関する主な研究成果を簡単に紹介しておこう。まず、奚柳芳が力を注ぎ、文献資料の検証のみならず、フィールドワークも行い、注目すべき成果を呈示した<sup>15</sup>。その結論は、「錢唐県治及び漢代の会稽西部都尉治は、広々とした伝塘の西の平野に立地する可能性が最も高い。」<sup>16</sup> この結論は、倪璠の結論と多くの共通の部分があるが、方法論としては、

11 『太平御覽』卷一七州郡・杭州。

12 陳橋駅主編『浙江古今地名詞典』、浙江教育出版社、1991年。

13 佟世恩『鮚話』(『仰視千七百二十九鶴齋叢書』所収)による。

14 『武林掌故叢編』第14集。

15 例えば、『錢唐故址考』、『關於錢塘故址的一些歷史地理問題——与林東華同志商榷』、『論錢唐故址的两个河川地理問題——答周黔生同志質疑』、『東漢時期錢唐県之廢復』及び『論靈山余(水経注)中的靈隱山』などの論文(『奚柳芳史地論叢』所収、河南大学出版社、1996年)。

16 奚柳芳「錢唐故址考」、上記の『奚柳芳史地論叢』。

フィールドワーク・大縮尺の地形図・文献調査以外、国外の歴史都市地理的研究方法も導入した。

呉維棠は、考古発掘と歴史自然地理学の分析によって、現在の老和山及びその北側にある山麓の平野には秦の錢唐県跡が立地するところであると指摘している<sup>17</sup>。近年の考古発掘の成果によって、老和山周辺は、新石器時代以来の集落や耕地が多数散在しているところとして知られる。このような集落と耕地の分布は、秦の錢唐県がここに置かれたことを示唆した。

林東華、周黔生、呉培玉など<sup>18</sup>の研究は、依然として現在の靈隱寺周辺に着目したが、その周囲が広がった。研究の出発点としては、『水経注』に靈隱山に関する記載がある。即ち、『水経注』漸江水注に「又孤石 壁立する有り、大きさは三十圍、其の上開散し、状は蓮花の如し。」との記載がある。この記載から、靈隱山は蓮花峰であると認識できるのではないかと思われる。現在、石蓮は既になくなったが、石蓮寺や石蓮亭などの地名がまだ残っている。細かい地名の分析によって、秦代の錢唐県は、宝石山、老和山、靈峰山、北高峰、鷄籠山、南高峰の一体であると比定できる。また、考古成果より、この一帯に県治の基盤とした複数の集落の存在も確認された。

要約すれば、秦代の錢唐県は、その具体的な位置が今まで確認されていないが、私はこの課題に関する研究が深く進められていくことを期待している。

#### IV 両漢時代の杭州

以上の分析によると、秦代において、錢唐という県名と今日の江干の辺りにある名も知り得ない渡し場の他、古代文献には杭州地域に関する地名は見えない。当時、ここは辺鄙の海隅で、歴史的記載が欠けることはいまでもない。およそのことを言えば、この時期は錢唐県を含む会稽郡全体が比較的衰微している時期であると思われる。秦はこの地域を占領した後、越人を彼らの最も重要な中心地である会稽郡から強制的に「烏程、余杭、黟、歙、无湖、石城」各県、即ち、現在の浙江省西部と安徽省南部に遷移させた<sup>19</sup>。このような政策は、大越の近畿である錢唐に与えた影響が多いと思われる。当時、この地域の状況については、葛劍雄が「浙江省西部と安徽省南部に遷された越人は、その一部が徐々に当地の漢人と融合してきたが、その多くは山間部に逃げ込み、山越となった。三国時代初頭に至るまで、山越人が終始して漢民族政権に収められていない。」と指摘した<sup>20</sup>。このような状況は前漢時代までに続いた。葛劍雄の統計によれば、面積近7万平方公里を有する会稽郡北部では、元始二年（公元2年）にも人口は僅か98万人弱である。まさに司馬遷が目撃したとおり、当時この地域は「地広く、人希れなり。」<sup>21</sup>

17 呉維棠「杭州的几个地理变迁問題」、『歴史地理』第5輯（上海人民出版社、1987年）所収

18 林東華「錢唐故址考辨」（『浙江学刊』1987年第3期所収）。

林東華、錢桂庭「秦漢時期的杭州—錢唐故址考兼論西部都尉治」（『南北朝前古杭州』所収、浙江人民出版社、1997年）。

周黔生「対（錢唐故址考）的兩点異議」（『浙江学刊』1987年3期所収）。

呉培玉「秦漢古錢唐考辨」（『中国地名』1995年第4期所収）。

19 『越絶書』卷二。

20 『西漢人口地理』、人民出版社、1984年。

21 『史記』貨殖列伝。

なのである。

しかし、元始二年の資料に基づいて編纂した『漢書』地理志によると、錢唐が会稽郡に属する県ではなく、行政レベルがもっと高い会稽郡西部都尉治となった。この事実から、前漢初頭の杭州地域においては、ある程度発展していた動向が見られる。また、『越絶書』巻二にも、「漢文帝前十六年、大守 吳郡に治し、都尉 錢唐に治す。」と記されている。しかし、この記載も後漢時代の人が書き込んだものと思われる。なぜなら、漢文帝の時には、吳軍がまだ成立しておらず、杭州地域が吳国に属していたからなのである。以上のことから、会稽郡西部都尉治が錢唐県に設置された時期は漢武帝の頃ではないかと思われる。

研究資料が極めて乏しいので、この会稽郡西部都尉治の具体的な状況については、まだ十分明らかになっていない。

後漢時代、杭州における「防海大塘」の建設は注目すべき事業である。このことについての最初の出典は『錢唐記』である。その後、『水経注』漸江水注などの文献にも引用されている。『水経注』漸江水注には、「『錢唐記』に曰く：防海大塘は県の東一里許に在り、郡議曹華信家議して此の塘を立て、以て海水を防ぐ。始めて能く一斛の土を致す者を開募し、即ち錢一千を与える。旬月の間、来る者云集し、塘未だ成らずして復（土を）取らず、是に土石を載せる者皆棄てて去り、塘之を以て成り、故に名を錢塘と改める。」と記されている。また、このことについては、『後漢書』朱儁伝注と『通典』<sup>22</sup>にも『水経注』とほぼ同じく引用されている。

以上の記載は、施廷枢が「千錢 衆を誑すの陋し。」<sup>23</sup>と批判したように、あくまでも伝奇物語であるが、一方、錢唐県内にこの「防海大塘」が存在する事実を語った。私は「施氏の論説は合理的であるが、錢塘は我が国の最も古い海塘の一つとして、『錢唐記』の記載によって後世に伝えられた。」<sup>24</sup>とコメントした。

最後に「防海大塘」とその建設時期について、もう少し検討する。

まず、南北朝初期の文献である『錢唐記』に「防海大塘は県東一里にある」と記されている。この記載から、海塘の存在が確認された。また、『錢唐記』の著者、劉道真是自分すら信じない伝説を『錢唐記』に引用したことからみると、この海塘の建設時期は劉宋時代に近い晋代もしくは三国の呉ではなく、劉宋時代より遙かな昔であることがわかる。また、前述したように、秦と前漢の時代では、杭州地域が比較的衰微している時期にあったのであるが、それに従えば、「防海大塘」が後漢時代に建設された可能性が高いと思われる。もちろん、これは一つの推測に過ぎず、「防海大塘」に関する研究は、杭州の歴史地理的研究において重要な課題になると思われる。

22 『通典』卷一八二州郡十二。

23 全祖望『水経注』五校鈔本、天津図書館所蔵。

24 「(水経注) >記載の水利工程」(『水経注研究』所収、天津戸籍出版社、1985年)。

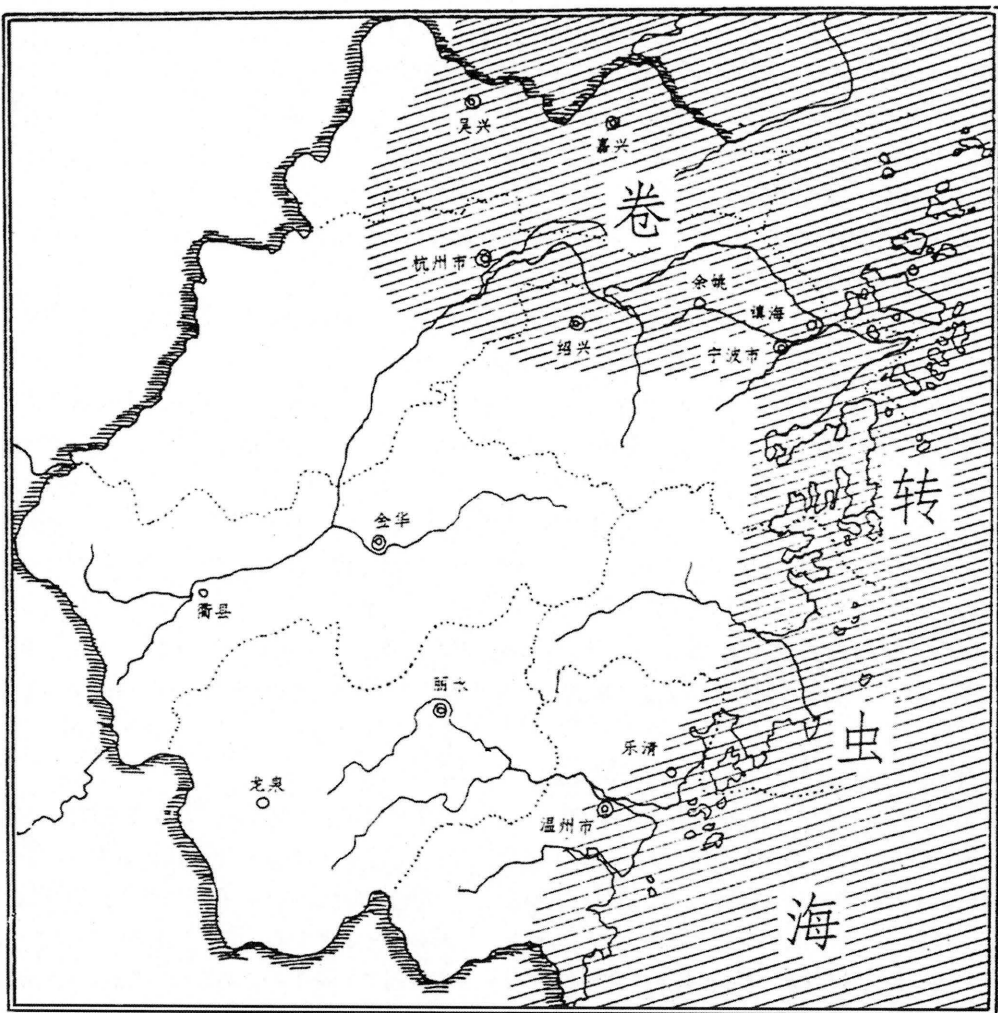


图 1 卷转虫海进时期今浙江省境示意图



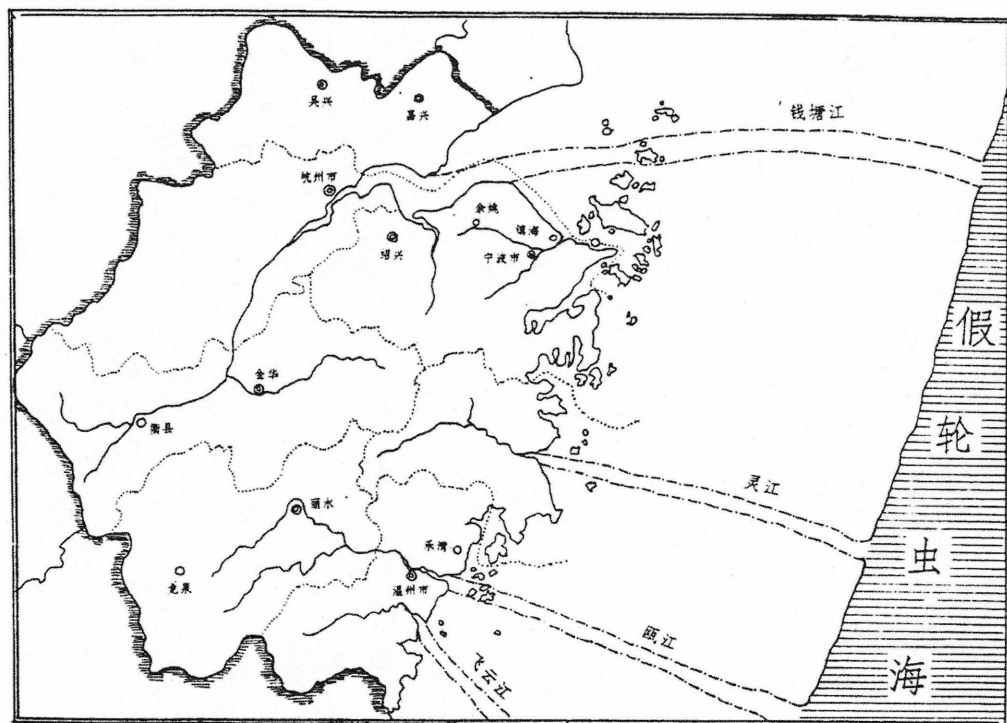


图2 假转虫海退时期今浙江省境示意图

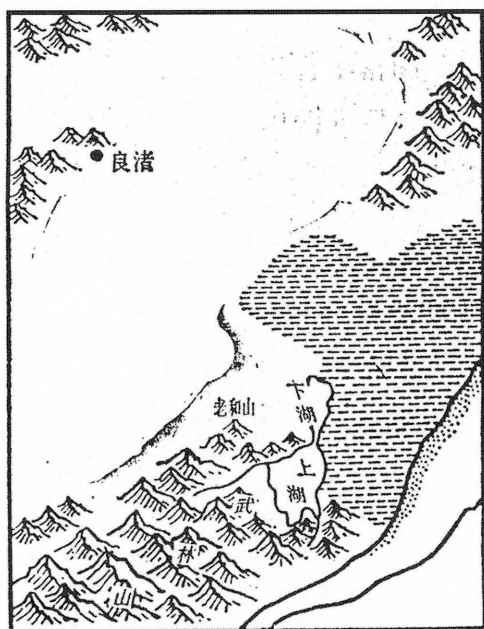


图3 良渚与老和山示意图



图4 西湖的形成示意图



## 【要旨】

都市の生成と都市文明の発達、その都市の自然環境・経済発展・歴史政権などさまざまな要素と密接的な関連があることは言うまでもない。しかし、中世東アジアの大都市である杭州は、その早期の歴史や地理的存在については、まだ十分明らかになっていない。

本稿では、まず、「禹と治水」の伝説の舞台が杭州に近隣する銭塘江であること、さらには、銭塘江に興った洪水が第四紀の海岸線の変遷により発生したものであろうことなどを指摘した。それに従えば、杭州を含む銭塘江下流域では、中国歴史の伝説時代から既に文明が生じていると推察される。

そして、先秦時代の杭州において、主に越族の国である呉と越に関する文献資料を利用した。杭州及び周辺地域の自然環境や交通条件の変遷を分析したのち、当時の杭州は銭塘江の渡し場であると判明し、その成り立ちや役割などについても検討した。尚、秦漢時代の杭州古城（銭唐県城）の具体的位置に関する議論は現在もまだ続いているが、銭唐県設置の事実から、当時の杭州では、漢民族が入植すると同時に、政治的営力が強化する動向が明らかに見られる。最後に、杭州の都市プランに関する注目すべき点は、「防海大塘」が恐らく後漢時代に造られたことである。

このような分析から、早期における杭州が都市としての成立、及び先秦及び秦漢時代の発展は、中世杭州の都市文明の繁栄に大きな影響を与えたと考えられる。

## 【コメント】

愛宕 元

589年、隋が陳を併合して270年ぶりの統一が達成されて銭唐県の地が杭州に昇格され、その直後に大運河が杭州まで延伸されるようになると、杭州及びその付近、すなわち浙西地方の歴史地理的な様子がかかなり具体的になってくる。10世紀以降の宋代、とりわけ杭州が行在臨安府とされる12世紀の南宋時代になると、政治・経済・文化の中核地区であるがために各種の文献史料が編纂され、それら文献学的研究によって杭州付近の歴史地理的な姿はより一層明確にされつつある。それに対して、隋唐以前、ましてや先秦時代や秦漢時代のこの地は華北の漢人にとってはほとんど未知の地であり、三国孫呉の時期になってようやく開発の端緒がつけられ、ある程度の歴史地理的な様相が明らかになる。

本発表はきわめて文献史料が少ない先秦から秦漢時期の杭州地方に関する歴史地理的な研究について、考古学の成果、古地理学、歴史地理学的なフィールドワークの手法などを幅広く活用して、今後の新たなる研究発展の可能性を強く示唆する興味深い内容であった。禹の治水伝説は黄河や銭塘江の洪水に対するものではなく、第四紀温暖期の海面上昇による海進に基づく洪水を浚渫によって治水したものが伝説化したものであるという新見解は、そのスケールの大きさや斬新な発想に大いに興味をそそられる。浙江地方の海岸線がほぼ安定し河川の流路も現在のそれに近いものとなる有史以後においては、古文献にわずかに散見する渡津が歴史地理